

献 辞

末永朱胤先生は1997年に成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科に着任し、以後、一貫して言語学を講じられた。授業の傍、フランス、スイスに赴いてソシュールの原資料にあたり、研究会に参加して、2003年7月、パリ第10大学で博士号(言語)を取得。原著は2005年、ランベール＝リュカスから公刊された。先生は丸山圭三郎門下のもっとも正統的なソシュール研究者のひとりであり、もっぱら言語学理論と学説史を主題として論文を発表して来られた。それゆえ、言語学から精神科学に進んだ恩師が著した『言葉・狂気・エロス 無意識の深みにうごめくもの』(講談社現代新書、1990)が、装いも新たに講談社学術文庫(2007)に収められ、解説に末永先生の名を見出した時、これから先生も「思想」を語り始めるのだろうか、と呟いた読者は少なくあるまい。「先生も」と書いたのは、言語学者には画家アングルが玄人はだしのヴァイオリン奏者であったように、技芸を誇る書き手が多いからである。

ところが先生は違った。それは先生が言語学の使い手というより、むしろ言語の旅人だからである。長崎育ちの先生は、ある特定の言語をいわば自然に習得し、次は意識的にフランス語を学び、そしてソシュールの話し、書いたフランス語を読み解くことで、言語なるものを探求する旅を続けておられる。

このたび定年といういかようにも詮無い定めによって、末永先生とお別れする。思い出すのは中学生の頃に読んだ盛唐の詩人王維の「送元二使安西」という七言絶句だ。西域に赴任する友は長安西北の渭城まで見送るのが当時の習わしだった。友人たちは渭水を超えて北の咸陽(渭城)に宿を取り、宴を開いた。そこで詠まれた送別の詞、ということになっている。

「客舎青青柳色新」。雨に洗われた柳葉は目に鮮やかである。さしずめ本号は先生を囲んで友が集う「客舎」であろう。寄せられた7本の論文は友が旅人の無事を祈って渡す「柳」の枝の輪。いや、転句が「君に勧む更に尽くせ一杯の酒」と続くから、ワインがお好きな先生ならばそれは7本の酒瓶だろう。名残は尽きない。

「西のかた陽関を出づれば故人無からん」

言語の旅人は、もはや知人も居そうにない、その先の学問に向かわれる。慶賀すべき出発の日に、先生は我らの貧しい手向けを受け取ってくださるだろうか。

有田英也